

序

生田真人先生は、2018年3月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、ここにご退職を記念する論集を編み、先生に献呈させていただくこととしました。

生田真人先生は、大分県のお生まれで、鹿児島大学をご卒業後、大阪市立大学大学院文学研究科に進学されました。そして1980年7月に東京都立大学理学部の助手に着任され、研究者としてのキャリアをスタートしておられます。1985年4月より大阪市立大学に転出され、経済研究所講師、1988年より助教授として活躍されました。そして1996年4月に文学部の地理学専攻の教授として立命館大学に着任され、現在まで22年間にわたって本学の教育・研究に力を尽くされました。この間、数度にわたり地理学専攻および地域観光学専攻の主任などをお務めになり、学部・大学・大学院の発展に寄与してこられました。

生田先生の専門分野は、経済地理学で、特に大都市開発の比較研究をテーマとし、マレーシア、シンガポールといった東南アジアや日本の都市をフィールドの中心として研究をしてこられました。例えば、直近で『立命館文学』に寄稿いただいたのは、第650号（2017年3月）の「国際協調と国境地帯の産業集積—拡大メコン圏の形成をめぐって—」ですが、その中で生田先生は、拡大メコン圏（メコン川流域のカンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、ベトナムと中国南部）の経済動向とタイ、ベトナムの国境地帯の産業開発について論じておられます。個人的な話ですが、私は中国に留学中の1988年に、雲南省へ行きました。省都・昆明からバスで2泊3日かけて西双版纳タイ族自治州の景洪まで行き、さらにメコン川の上流である瀾滄江を船で下り、ミャンマー国境近くの村まで行ったことがあります。そうしたこともあり、生田先生の論文を非常に興味深く、楽しく読ませて頂きました。当論文は、経済地理学を専門とする生田先生の研究の緻密さがよくわかる内容だと感じました。

本号には生田先生の主要研究業績一覧等も掲載されておりますが、そのきわめて多数、多岐に及ぶご業績から、めざましい成果を挙げてこられたことがわかりますし、日本地理学会、人文地理学会、経済地理学会等で要職をつとめられたことから、この分野の第一級の研究者として大いに活躍してこられたことがわかるかと思えます。また、大阪市など地方自治体の各種委員をお務めになるなど、地域に対しても大いに貢献をしておられます。

海外の大学から招かれることも多く、1992年3月から1年間のマレーシア・マラヤ大学の客員研究員を皮切りに、シンガポールの Institute for Southeast Asian Studies、香港の香港大学、マレーシアの Universiti Sains Malaysia、カナダの UBC など客員教授や客員研究員に就任されました。このことは生田先生がグローバルに研究を展開された結果、世界から注目される研究者になられたことを示しております。

さらに、先生は、大学行政においても活躍されました。立命館大学に着任された2年後の1998

年4月から1年間、UBC ジョイントプログラムの教務主任として、カナダ・バンクーバーのUBCに行かれました。そして、帰国から2年後の2001年4月から3年間、教学部副部長として、その行政の手腕を存分に発揮されました。また、2011年7月からの3年間は、学校法人立命館の評議員を務めておられます。私が2003年に当時の国際インスティテュート主事を担当しました時、生田教学部副部長は非常に頼りになる存在でしたし、会議で議論が暗礁に乗り上げたときも、粘り強く説明を続ける生田先生の姿からは、その誠実なお人柄と真摯な姿勢を見ることができ、その後の私の大学行政における一つの指針となったような気がいたします。

生田先生はその教育・研究を通して優秀な研究者・教育者を多くお育てになりました。次の時代の地理学、地域観光学を担う人材が、先生の教えを受け、広く活躍しています。2018年4月からは特任教授として、しばらくは引き続き生田先生に教鞭をとって頂けることを、大変ありがたく存じております。今後とも、文学部・地域研究学域・地域観光学専攻および地理学専攻へのご助言を賜ることができますれば、幸甚に存じます。

二〇一八年二月

立命館大学人文学会会長

文学部長 上 野 隆 三